



高い技術力と生産体制で 要望に応える現代の鍛冶屋

北上市

富士善工業株式会社

工業振興を目指し、岩手県内でいち早く工業団地が誕生した北上市。そんな街の歩みとともに事業を多角化させてきたのが富士善工業株式会社だ。溶接技術をベースにメーカーの要望に徹底的に応える姿勢を貫き、未分野への挑戦も恐れない千田富士夫社長に歩みと展望を伺った。

一貫生産体制を構築、単品生産にも対応

戦後間もなく始まった高度成長期を境に、日本の製造業は大きく変化した。なかでも鉄鋼業など金属加工技術の革新たるや目覚ましく、現在につづく機械産業の基礎はこの時期に築かれたといえる。

工業の街・北上市に拠点をおく富士善工業株式会社も、創業は高度成長期真っただ中の昭和46年。東京で溶接技術を身に付けた千田富士夫社長が実弟の善三氏とともに郷里にて設立、「建築金物から神社の鳥居やモニュメントなど、創業当初は頼まれればなんでも作った」と千田社長は振り返る。がむしゃらに仕事に取り組むなかで技術は高まり、信頼も培われていった。

そんな同社の強みは、鉄、ステンレス、アルミまで対応可能な溶接技術をベースにした一貫生産体制。高精度なレーザー切断から加工そして組立までを自社内でやり、しかも溶接は県の溶接技術大会で数々の入賞を誇る人材を擁しているほどだ。また受注先のニーズに合わせて単品にもロット生産にも柔軟に対応、「いわば現代の『鍛冶屋』だ

ね」と千田社長は自社を評して笑う。その対応力は高く評価され、取引先は建築関連から産業機械、そして近年は自動車産業のライン設備や半導体関連の装置機器へも進出している。

まさに機械産業の変遷とともに業務を拡げてきた同社だが、現在ではもうひとつ、医療分野への挑戦を始めている。既に数年前には現場の声を反映した医療用テーブルや手術器材展開台を開発、岩手医科大学へ納入された。その実績を買われ、東京の防衛医科大学校と連携して開発したのが、ストレッチャーに取り付けて医療機器を搭載できる救急ラック。同社では県の工業技術センターへ従業員を派遣、1年かけてデザインを学ばせるなどして軽くてコンパクトかつ汎用性がある等、今までにない付加価値を持つ製品を作りあげた。

「未知の分野への挑戦を通し、当社のことを知らなかった大学や研究機関などへの情報提供が出来、またデザインを学んだことで若い従業員

に『やれば出来る』という実感が浸透したことも大きい」。

製品への反響はもちろん、取り組み自体の“効果”をそう語る千田社長。経験値のない分野へ立ち向かうことのリスクや、単品製造によるコストもクリアして掴んだのは、企業としてのさらなる成長と自信だ。それは、今後ますます需要が高まる自動車産業においても大いに役立つとも考えている。

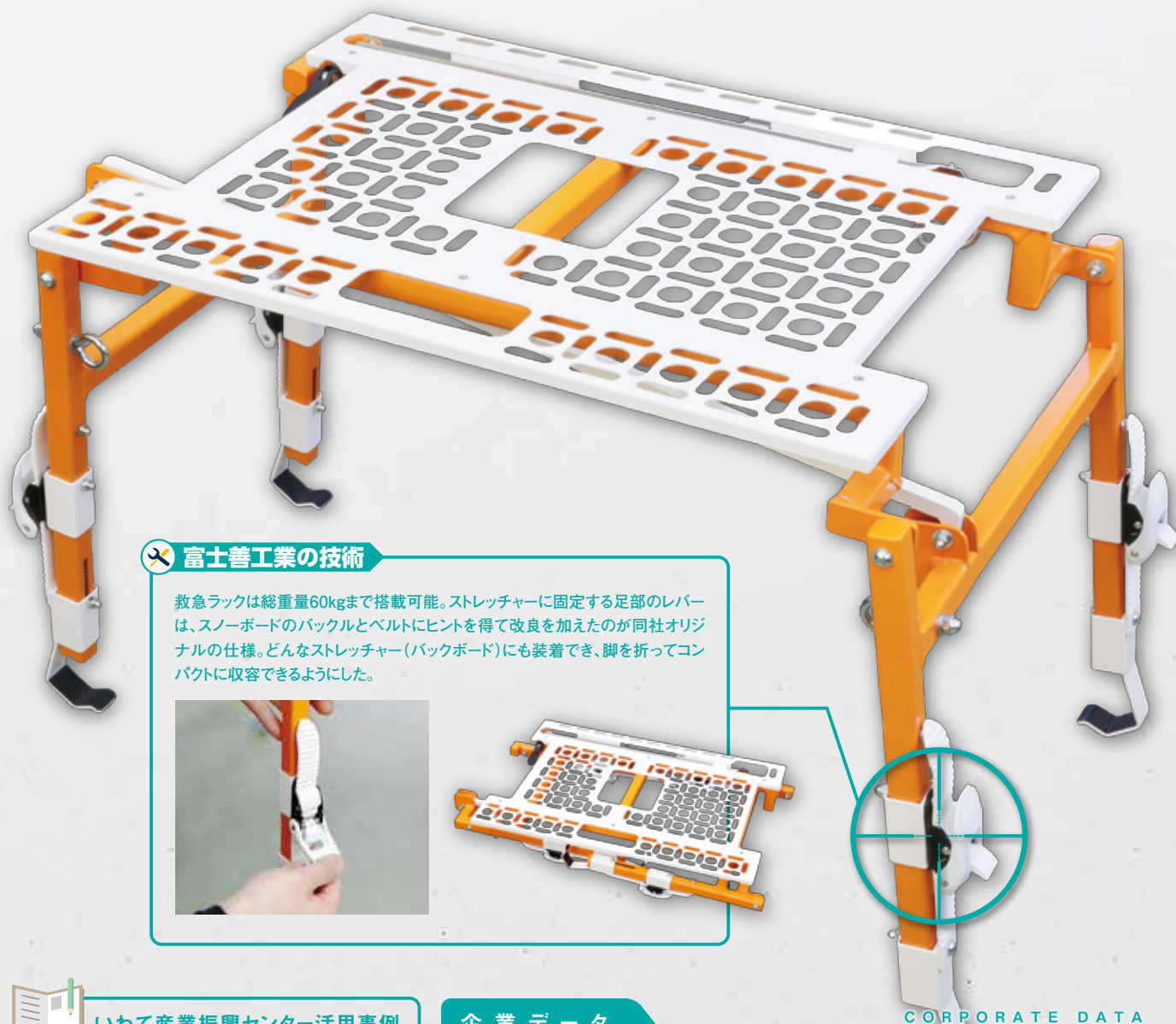
「自動車関連に伴い、半導体分野の受注も拡大していくのが理想。東北地方での部品調達はまだ2割程度、産業としての伸びしろは充分にあると思っています」。

代表取締役
千田富士夫



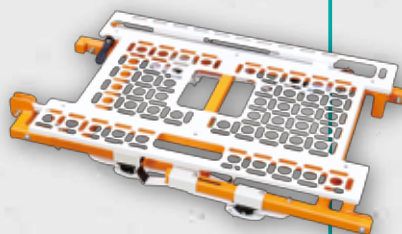


①第二工場の切断加工部門には昨年導入した最新鋭器ほか合計3台のレーザー切断機がある。材料は全てここで切断され、各部門に送られ溶接工程に入る。②誤差は許されない液晶関係の加工機械では溶接にも高い技術が求められる。③ベンダー（曲げ）工程にも熟練の目が光る。④半導体部門ではTIG溶接を実施。⑤地元企業との連携でトラクター用の除雪機も開発した。



✂ 富士善工業の技術

救急ラックは総重量60kgまで搭載可能。ストレッチャーに固定する足部のレバーは、スノーボードのバックルとベルトにヒントを得て改良を加えたのが同社オリジナルの仕様。どんなストレッチャー（バックボード）にも装着でき、脚を折ってコンパクトに収容できるようにした。



いわて産業振興センター活用事例

「いわて医療機器事業化研究会」の活動を通じて医療用テーブルや手術器材展開台を開発。救急ラックの開発では防衛医科大学校との連携支援を受けた。医療機器製品の展示会にも出展している。

企業データ

会社名 富士善工業 株式会社
本社 北上市鬼柳下川原145番地
電話 0197-67-2311
代表者 千田 富士夫

創業 昭和46年(1971)5月
従業員 75名
業種 金属製品製造企業
URL <http://www.fyc.co.jp/>

CORPORATE DATA